

# 南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ

## 第49回 日本人に生まれた幸せ

「ミナミの国の隣の国」に行ってきました(笑)。

東南アジア諸国の長男格、タイです。

ヤンゴンから見たら、バンコクは大都会、憧れの街です。街並みは綺麗だし、美味しいお店や、エステ、ブティックなどが東京並みにいくらでもあります。飛行機だと1時間で行けるし、ローカルの飛行機を使えば数千円程度の運賃なので、東京から大阪に日帰りできるように、立派な日帰り圏内なのです。

ヤンゴンにはあまり遊べる場所がないので、ヤンゴン駐在の日本人は、週末はちょっとバンコクで「飲み会!」とか「ショッピング!」みたいに、誘いあって、日頃のストレスの息抜きをしているようです。

バンコクの中心街には、高層ビルが立ち並んでいます、ビルとビルの谷間には、細いローカルの商店街などがたくさん残っていて、歩いていても楽しい。ちょうど109が出来る前の、渋谷のイメージに近い感じかもしれません。



高層ビルの立ち並ぶバンコク

困ったのはヤンゴンのように、どこでも英語が通じるわけではないこと。もちろんホテルや、『地球の歩き方』に載っているようなレストランでは、普通に英語で会話できるのですが、問題はタクシー。

最初にホテルを出発したときは、コンシェルジュが行き先を伝えてくれたので、何の不安も感じなかったのですが、次に流しのタクシーを拾ったときは、さあ大変。

相手はタイ語しか話さないので、地図を見せて、ここに行きたいと言っても、本当に伝わっているのが不明で、不安で仕方ありません。ヤンゴンと違って、こちら土地勘がない

ので、今どの辺りを走っているのかも、チンプンカンプン。

着いたよ、と降ろされても、えと…、ここはどこ?状態です。

お目当てのお店らしきものは、全く見当たりません。再度「英語で」行きたいお店の名前を伝え、「タイ語で」何かを一生懸命説明してくれるのですが、パーフェクトなコミュニケーション・ギャップ(笑)。

あきらめてタクシーを降り、あたりをキョロキョロ見回すと、小さなホテルを発見!ホテルのフロントに、目的地のお店を伝え、知ってる、知っていると、行き方を教えてくれました。

どうやら一方通行だったので、タクシーは入って行けなかった模様。6車線の大きな歩道橋を歩いて、反対側へ歩いて行くと、運転手は説明してくれてたらしい…ということが、分かりました。

あのドライバーさん、じつはとても親切だったのね…。

おそろべし、言葉の壁!

一方、ミャンマーでは、タクシードライバーや、掘っ立て小屋のようなショップの店員など普通のミャンマー人が、普通に英語を話します。

ミャンマーは、(アジアの中では)教育レベルが高く、国民の識字率は93%です。貧しくてお寺に引き取られている子供たちも、孤児院で育っている子供たちも、学校に行き、文字を勉強しています。街角には、あちこちに新聞スタンドがあり、タクシードライバーたちが、隅から隅まで、運転中に(汗)、むさぼるように新聞を読んでいます。

アジアの中でも、ミャンマー人は優秀な民族だと言われていますが、彼らが英語を話すのは、彼の国がイギリスの植民地だった影響もあると思います。ヤンゴンには、明らかにイギリスカラーが残っています。スノビッシュで、重厚。たとえばフランスの植民地だったカンボジアのプノンペンのように、小粋でお洒落な感じは全くみられません。彼らが国家として歩んだ歴史の空気は、良くも悪くも、彼らの現在を彩っているのです。

そっか。

日本人が英語を話せないのは、ヨーロッパ列強から、植民地支配されなかったからかもねと、同じように植民地支配から逃れ、英語の話せないタイ人を見て思いました。そして、

## ◆筆者 原 尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」で全国1位の成績を収め、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性のスタッフ約30名の規模にまで成長。一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に『小さな会社の総務・経理の仕事がわかる本』『小さな起業のファイナンス』(いずれもソーテック社)、『51の質問に答えるだけでできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)』『トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)』『世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)』『一生食っていくための土業の営業術(中経出版)』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

英語を話さなくても、自国語だけで生活できる国というのは、じつはとても幸せなことなんだろうと。

日本でも、外国人が乗ってきて、英語でコミュニケーション取れるタクシードライバーは、どのくらいいるのでしょうか?もしかしたら、日本人は、英語の地図が読めるから、会話はできなくても、目的地には到着できるかもしれませんね。

じつはミャンマー人は、日本人のように地図を読むことはできません。私たちは、当たり前のように小学校で地図記号を習いますし、「上が北」とか方角も分かるので、ドローンのように上空から地図を読む能力が、自然とついています。またシマシマの線は鉄道マークとか、駅とか、学校とか、ホテルのマークとか、共通の言語として、国民全員が共有していますが、どうやら海外では、当たり前のことではないようです。

話がそれましたが、タイ語とタイの通貨(バーツ)で暮らしているタイの人たちを見ていて、日本語と日本円で暮らせる私たち日本人と似ているなと、共通点を感じました。成田の飛行場内にあるスタバでさえ、ドルで支払えない日本。

ミャンマーやカンボジアは違います。ホテルや外国人向けのレストランでなくても、小さなショップでも、スーパーマーケットでも、ドルでお買い物ができます。カンボジアにいたっては、自国通貨のリエルよりも、ドルの方が流通してるぐらいです。

今回、タイに行った目的の一つは、チェンマイでの孤児院訪問でした。HIVに母子感染し、行き場のない子供たちを引き取ることから始まったバーンロムサイ。エイズで亡くなっていく貧しい子供たちを見かねて、名取美和さんという日本人女性が立ち上げた施設です。バーンロムサイがすごいのは、寄付だけに頼るのではなく、自分たちで洋服を作って売ったり、ホテルを経営して、自立の道を歩んでいることです。

名取さんの話を伺いたいと訪問し、現地のコストコ?みたい

なスーパーで、半年分のお米や油や洗剤を買って、プレゼントしたのですが、使えるお金は、タイバーツのみということで、お財布にはとても入りきれない量の紙幣を、紙袋に入れて持って行く羽目に(笑)。



ビルの谷間の路地

ミャンマーでも、お給料は現金支給がまだまだ一般

的です。給料日ともなると、ミャンマーチャット紙幣を、スーパーのビニール袋に詰め込んで、用意しなければなりません。口座が作れないからではなく、ミャンマー人は、銀行を信用していないからです。

私たち日本人は、ミャンマーのローカル銀行でも、何しろ銀行と名前のつくところは、全面的に信用するので、日系企業からの顧問料は、振込というパターンが多いのですが…。

つい先日のこと。

銀行から毎月、届くバンクステイトメントの今月頭の繰越残高が前月末残高より5,000ドルも少ないではありませんか!すぐに連絡して訂正してもらいましたが、ミャンマーあるあるとか、シャレにもなりません(汗)。

ことほどさように、タイへの視察ツアーは、日本の良さ、そして国力というものがいかに重要かを、再認識する旅と相成りました。日本に生まれた私たちは、それだけで本当に幸せです。

**最新 小さな会社の総務・経理の仕事がわかる本**

原 尚美 著、吉田 秀子 著(ソーテック社) 1,400円+税

総務・経理の仕事…すべてをできるようにするには、とても時間がかかります。大きな会社に入社しても、小さな会社に入社しても、たくさん覚える必要はありません。そんなとき一番困るのが、必要書類がわからない、書類の書き方がわからないといったことです。本書は、必要な書類とその書類の書き方のサンプルをできるだけ掲載しています。総務・経理のしごとに携わるすべての人に読んで、参考にして頂きたい本です。

マイナビ 対応

最新 小さな会社の 総務・経理の仕事がわかる本